

# 人権尊重と 脱植民地・グローバルサウス主軸理論を考える

久保田竜子 Kubota Ryuko

ブリティッシュコロンビア大学教授

本連載の最終回では、批判的応用言語学における「当たり前」を問う立場を確認しながら、コミュニケーション教育としての英語学習の理念、特に人権尊重を考えます。近年関心が高まる脱植民地およびグローバルサウス主軸理論(decolonial and Southern theory)を参考にしていきます。

## 英語学習と人権

学習指導要領に掲げられている各段階の学習目標は、英語によるコミュニケーションを図る資質や能力を培うことです。では、英語でのコミュニケーション能力とは何でしょうか。答えは当然、4技能を磨き英語で理解したり伝え合ったりする力、となるでしょう。そのため、英語教育の重点は技能習得に置かれがちです。しかし、ここで問わなければならないのは、その技能を使って何を理解したり伝え合ったりするのか、どんな態度でそれに臨むのかという問題です。もっと言えば、学習者が日々教室で接する学習内容や活動は、個人あるいは集団の日常生活やよくある場面を説明したり、外国(特に英語圏)の生活文化に触れたりするだけで終わってしまってよいのか、それとも人類が直面している多くの課題を乗り越えて、将来の日本・世界市民の責任ある一員として、あるいは人権が尊重されるべき人間として生きる素地を育てることに寄与するのかという問題です。

人類はまさに存亡の危機に遭遇しています。気候変動、自然災害、軍事衝突、難民増加、経済危機、経済格差、福祉崩壊など枚挙にいとまがありません。さらに、直撃を受けるのは社会経済的弱者です。例えば、貧困層／国、先住民族、女性、人種／民族マイノリティ、LGBTQ+、障がい者

などです(が、権力関係はアイデンティティの交差性によって複雑に左右されます)。したがって、人類の平等な持続可能性を希求するには、弱者の人権擁護が不可欠です。さらに、人権を尊重するためには、他者の尊厳を認めると同時に、自己の社会における立ち位置、そして自分では気づきづらい差別意識を表面化しなければなりません。

本誌の読者が日々接している英語学習者は、将来、どんな成人になるでしょうか。日本だけでなく世界で展開する企業や組織で働く者もいれば、日本の地域社会で生計を立てていく者もいるでしょう。前者の場合、近年、存在感を一層増しているグローバルサウス(主に南半球に位置する新興国)を含めて、世界のエリートたちと英語をはじめとした外国語を介して仕事をしていきます。多様な価値観や世界観を理解し折り合いをつけていく力が必須となるでしょう。反面、後者の場合、英語は直接必要ないかもしれません、中には音楽や映画が趣味で英語を学習したりする者もいるかもしれません。ただ、以下で論ずるように、内なるグローバル化が進む日本では、いかなる状況においても、人権意識に根づいたコミュニケーションの態度や倫理観が不可欠になってきます。

## 言語使用者と人種の力関係——自己と他者

上では、趣味としての英語学習に言及しました。学習者のモチベーションを高めるために、授業でも英語の大衆文化を扱うことがあるかもしれません。一見、それらは人権とは関係がないように思われますが、映像や台詞や歌詞の中の人種、民族、ジェンダー、性的指向、言語などの規範的言説やバイアスが潜んでいます。ハリウッド映画や音楽、書籍など、多くの文化作品が人種や民族に対する偏見や差別的内容を含んでいます。これらは、言語使用者としての自己と他者との関係性を構成する重要な要素です。



ド映画やディズニー映画では近年、人種差別撲滅への努力が見られるようになりましたが、大衆文化に限らず、他のいかなる情報も無批判な消費は、現存する差別の容認につながってしまいます。

例として、日浅（本連載第2回）が論じた白人<sup>ほと</sup>性を纏つたネイティブスピーカリズムについて考えてみます。白人英語母語話者に対する学習者の羨望には根強いものがあります。白人英語母語話者を「かっこいい」と思う裏返しは、非白人・非母語話者に対する劣等視です。実際、英語圏ではノンネイティブの英語話者や非白人の英語話者は劣等視されがちです（本連載第4回の坂本稿参照）。実はそのような偏見を持っているのはアジア系ノンネイティブの「自分」でもあります。このように、自分は白人英語母語話者に比べて劣るが、他の有色人種の英語非母語話者もさらに劣る、というように、白人英語母語話者の優越感のメガネをかけて自分と他者を捉えてしまっているのです。

さらに、日本語の母語話者である「自分」は、留学生や技能実習生など、日本で暮らす外国籍の有色人種の生活者たちの使用する日本語を、自分たちの日本語と同等に評価するでしょうか。「国際語」としての英語の学習が推進されるのに、これらの外国につながる人々にはなぜ日本語が強要されるのでしょうか。「国際」とは何を指すのでしょうか。その反面、同じく日本で暮らす白人英語母語話者の話す日本語を私たちはどう捉えるのでしょうか（久保田2023）。ここでは「自分」が他者に対して優位に立つ構図も見てとれます。この日本人母語話者優位と白人英語母語話者優位の二重メガネを問題視する手立てとして、近年、応用言語学研究で盛んに取り上げられる脱植民地およびグローバルサウス主軸理論を考えてみます。

### 脱植民地・グローバルサウス主軸理論

1960年代以降、西欧植民地支配からの独立運動を背景に、ポストコロニアリズム研究が盛んになりました。植民地主義や帝国主義が社会・文化・精神に与えた暴力性を批判し、新しいハイブリッドなアイデンティティを構築する思想運動です。同様に、脱植民地理論は特にラテンアメリカの研究者たちが中心となり、知的活動において正統とされる知識が西欧中心であることを批判しています。

○ガザでの殺戮と言論の混乱の中で、真相を探求する必要性を実感しています。（久保田）

す。アメリカ大陸などの開拓者植民地においては、ヨーロッパからの白人入植者が先住民族の土地だけでなく言語、文化、生活習慣を収奪し、英語やスペイン語を押しつけた歴史がその根底にあります。さらにグローバルサウスの多くの社会も同様の問題を抱えています。したがって、疑問視されるべきは社会構造や知識の中にある白人優位のレインズムであり、社会生活におけるあらゆる抑圧と不平等だと言えます（Kubota, 2021）。

無論、英語の世界的拡散は植民地主義と密接な関係にあり、白人英語母語話者や西欧知識の優位性もこの名残です。日本の英語学習者はこの抑圧構造に支配されつつも、それに迎合してしまっています。日本の米国追従も同じです。脱植民地およびグローバルサウス主軸理論は、これらの特権や優位性を打ち碎く役割を果たします。

逆に、英語学習者が日本の外国籍住民に対して正しい日本語を強要したり見下したりすれば、抑圧者となります。実際、日本は過去に朝鮮半島と台湾を植民地としアジアの各地を帝国支配する中で、日本語を押しつけ、多くの民間人の命や人権を奪いました。アイヌや琉球民族への差別も依然続いています。コミュニケーション能力を備えた英語使用者はこのような加害の歴史を直視し、同じ間違いは繰り返さない決意を確認し、すべての人権を守る態度と行動を培わなければなりません。

### 最後に

では、どう実践したらいいのでしょうか。批判的応用言語学の理念を踏まえると、あらゆる概念や事象に疑問を投げかける必要があります。教材や指導の中で「当たり前」となっていることが、実は見えない権力によって操作されていることに気づかなければなりません。授業の中で扱う人間・国・文化・歴史・価値観などに偏りがないかどうか、あるとしたらなぜなのか、どうしたら改善できるのか、模索することが大切です。

「当たり前」に対するクリティカルな問い合わせ多様性を盛り込むこと、そのために教師は自分自身の既成概念を問い合わせることが必要です。未来を担う責任ある市民として、有権者として、人権を尊重するコミュニケーション力を培うことが日本と世界の将来を救う鍵となるでしょう。